

日本語教育における文法の問題

——動詞表現における助詞の用法——

森 田 良 行

I 動詞表現と助詞の問題

日本語を学ぶ外国人にとってむずかしいことの1つに助詞の使い分けがある。同じ「山」でも「住む」なら「に」をとり、「生活する」なら「で」をとるといった使い分けである。

山に住む / 泊まる

山で生活する / 暮らす / 過ごす / (月日を送る)

これら助詞の使い分けは後続動詞によるばかりではない。

富士山にのぼる。

坂道をのぼる。

と先行語による場合もあり、さらには同じ文脈でありながら

教室にある。 / 教室である。

のように助詞に使い分けの見られる場合もある。これは「～にある」なら何か物品が置かれている(または設置、保存、展示されている)という場合を考え、「～である」なら「開催する」という意味から、会議・映画会・音楽会・宴会・講演・試験等の行事や催し物を連想する。このように、日本語においては前後の文脈や表現者の発想の違いによって助詞の使い分けがおこり、これがはじめて日本語を学習する者にとってきわめて習得困難なものの1つとなっているのである。

ところで、こうした助詞の使い分けに関し、一般の辞書類や文法書では、単にその助詞自体の意味や用法を分類し、個条書式的に解説し、用例をいくつか示すのみで、特に後続動詞とのかかわり合いや、それをもとにした

各助詞の本質的機能の問題、さらには各助詞間の意味・用法上の違いなどにふれていない。これは、現在の国文法が、単に品詞分類を旨とし、分類された個々の品詞に対しては、そこに所属する各語ごとの意味・用法をただ列挙的に記述するにとどまっているためである。そこには最も具体的言語事実である「文表現」への発展をめざした、文脈展開における語から語への意味的関連と制約、各語間の意味的結びつきというものになんら考慮されていないのである。

日本語教育において望まれる文法とは、とりもなおさず表現に結びついた文法、文表現への発展をおさえた文法である。文法書のように品詞論として助詞の総括的機能を解説することでもなければ、国語辞典のように「に」や「で」の意味を個条書き的に分類整理することでもない。格助詞が他の助詞とどう違うかを知っていても、また「に」や「で」に何種類の意味があるかを知っていても、それは概念的知識でしかなく、日本語を正しく表現し理解するためにはなんら役立たない。なぜこの文脈のとき「に」が立って「で」が立たないのか。前後の文脈とそこにあるべき助詞との有機的関係を整理し、助詞の選択が表現の発想にまで結びつくような、文論・表現論の立場からの文法記述が要請されるのである。

日本語の動詞表現は、述部たる動詞を中心に、順次

ダレガ イツ ドコデ ダレト 何ヲ スル。
(何が) (何人デ) (何ニツイテ)

と連用修飾語を冠していくことにより、1つの動作・作用表現へとまとまっていく。(この組み合わせをまとめると次ページの表のようになる。)

ところで、いったいなぜ時間の「～で、～までで」は場所の「～まで、～で」と結び付きにくいのか? 「10時で学校まで行きます。」 「10時までで家で寝ます。」のような言い方が成り立ちにくいのはなぜか? どのような問題は少なくとも従来の文法論ではらち外の問題であった。これからの文法研究はこのような問題をも射程に収め得るような論的立場が要請される。文法は語論のわく内に閉じ込めるべきではない。文法は形式の問題であるとして意味の問題をなおざりにすべきでもない。「ダレガ イツ ドコデ

私は 彼は	10時から	教室へ	本を	運びます。
		教室に	——	いました。
	10時まで	”	本を	運びつづけていた。
		教室で	——	眠っていた。
		”	本を	読みます。
		”	——	
私は 彼は	10時に	学校から	——	帰ります。
		”	電話を	かけます。
	10時までに	学校まで	——	行きます。
		学校へ	電話を	かけます。
		学校に	——	来ます。
		家で	——	寝ます。
		”	食事を	します。
		家 を	——	出ます。
		”	——	
	10時で	家 へ	——	帰ります。
	10時までで	家 に	——	帰ります。
		東京を	——	去ります。
		—	仕事を	やめます。
		——	——	寝ます。
		——	——	
		——	——	
		——	——	
		——	——	

ダレト 何ヲ スル。」という文表現への拡張を目ざし、個々の句(文節)は常に動作作用表現という全体の意味の流れ(文脈)の中の一機能としてとらえられていく、そのような文論と直結した文法論が必要なのである。このような文法的視野に立つとき、「ダレガ (ハ)・・・スル」という助詞「は、が」の問題や、動作作用表現において重要な「イツ・・・スル」「ドコデ・・・スル」という時間・場所の問題、「何が・・・スル」「何ヲ・・・スル」という自動表現・他動表現の問題、「・・・スル / ...シタ / ...シテイル」というテンスやアスペクトの問題、さらには「・・・サレル / ...サセル」という受動態や使役相の問題などが重要な課題として浮かび上がってくる。これらの諸問題を解決し、それによって得られた知識をもとにそれらのルールを練習に取り入れ、順次組み合わせ拡張して文表現へと高めていくことこそ真に役立つ文法能力を身につけることとなるであろう。

このような学習計画を立てる場合、特に注意しなければならないことは、「何が何スル」という現象文学習の課程の中に「何ハ何ダ」「何ハドンナダ」という判断文をませこんだカリキュラムを組むことである。これは学習者に無用の混乱とむだな骨折りとを与えることになるであろう。「～スル」の動詞表現で始まったなら「～シタ、～シテイル、…」とその課程が終わるまで動詞表現1本でおし通し、先の拡張法で時間表現、場所表現、…と順を追ってみっちり教えこむことが肝要である。その場合、動作・作用表現と関連づけて、時間・場所表現における格助詞の用法もあわせ扱うことが望ましい。時や場所の表現は動詞表現(動作・作用表現)に主として用いられるということを銘記すべきである。皆で付句をしていく遊び「ダレガ・イツ・ドコデ・ダレト・何ヲ・シタ。」というあのゲームは、動詞表現だからおもしろいのである。

II 動詞表現における時間の言い方

動作・作用表現における時間の言い方は次の6種である*。

- | | |
|-------------|--------------|
| ① 10時から始まる。 | ② 10時まで続く。 |
| ③ 10時に終わる。 | ④ 10時までに終わる。 |
| ⑤ 10時で終わる。 | ⑥ 10時までで終わる。 |

1. 「～から」の用法

「から」は動作・作用・状態の開始点を表わす。「から」によって導かれる動詞は本来継続を前提とした行為・作用の動詞(継続動作動詞)である。

○ この4月から勤務することになりました (II 47)**

* これは動詞を伴う用法に限った場合である。「あした終わる。」のような、それ自体連用修飾語として動作・作用の時間性を表わす場合は、ここでは考察の対象からはずしてある。

** 用例は早大語研日本語中級教科書から採った。アラビア数字は第I部、第II部、第III部を表わし、算用数字はページを表わす。(II 47) は中級第II部47ページから引用の意である。なお、他の資料や作例は表示を欠く。

○ 勤めを終えてからあちこちほうろうする傾きがある (II 85)

瞬間動作、たとえば「10時から死ぬ」などとは言えない。しかし、

○ 大学生活は入学式から 始まります。(I 9) のように「～に始まります」と置きかえ可能な瞬間動作動詞が用いられている場合もある。この場合は、その背後に必ず継続行為や状態(ここでは大学生活)が予想されるときである。「から」は行為・動作・状態の継続する範囲の起点を区切る意識があり、「それ以前は違うがそれ以後は」という気持ちを持つ。それゆえ状態を示す「ている、である」、継続を示す「ていく、てくる」の表現形式をとることが多く、この場合は「ずっと前から死んでいる」のように瞬間動作動詞も成り立つ。

○ 若いころから存じ上げております。(II 27)

○ 夫が死んでからは亡夫の世話になっていた。(III 46)

○ 以前から若い人たちに愛好されてきた。(I 44)

また「から」の先行語は一時点を示すもののみとはかぎらない。時間的幅をもつ場合もあるが、「から」の開始点の意味に変わりはない。

○ こどものときから将来、気象学をやろうと思っていた。(II 62)

○ 古くからこの交通による利益は...が専有するに至ったのは (III 60)

「から」は「10時から」と名詞を受ける場合の他、「...シテカラ」と「て」を介して動詞を受ける場合も多い。この場合は「...シテカラソノアトデ...スル / ...シテ以来...ダ」の意となる。「から」を省略しても文意は変わらない。

○ 茶を飲んでから茶わんをちょっとながめた。(III 52)

○ 東京へ来てからもう3年半が過ぎました。(II 43)

この場合「から」に導かれる動詞は瞬間動作動詞も可能である。なお「茶を飲むから...」と動詞に直接する場合は原因を示す「から」で、時間の「から」ではない。

「から」によって導かれる部分も動詞以外にいろいろあるが、時間の起

点という意味ではこれも同じである。

- きょうは朝から暑い。
- 10時から開始です。
- 大学を卒業してから後の生涯は (II 58)
- 桃山時代から伝世の茶わん (III 53)
- その前って、いつごろからですか。 (III 91)

「から」が起点を表わすところから、開始された行為・作用・状態の終点を示す「まで、に、へ」などと呼応する形式が生まれる。

- 8時20分から夜10時5分まで授業が行なわれています (I 4)
- 建国ごろから平安朝までは西のひとり舞台だった (III 59)
- 6月中旬から7月上旬にかけてこういう気候になる (I 37)
- ゴシックからルネサンス、さらにバロックへという発展 (III 64)

2. 「～まで」の用法

「まで」は継続する行為や作用・状態の範囲（行為の続きおよび期間）を表わす。行為・動作・作用・状態の継続がいつまで続くか、継続のおよぶ限界を示す。

- 夜おそくまで試験勉強をする。 (I 44)

「まで」によって提示される時点を境に、以後はそうではないということ念頭においた言表である。

- いままでは都電でしたが (I 8)

「～から～まで」と行為・作用の開始を前提とした表現で、継続する行為・作用・状態を「から～まで」の範囲で区切り、「まで」以前はそうであったが「まで」以後は違うという意識をもつ。その意味では「から」と「まで」とは表裏をなす表現と言える。

- 終戦の翌年から今日まで21年間 (III 23)
- 7月上旬から9月上旬までの約2ヶ月で (I 10)

「まで」によって引き出される動詞はふつう継続動作動詞・状態動詞で、瞬間動作動詞の場合「15日まで結婚する」とか「火曜日まで死んだ」などとは言えない。ただし継続性も表わす動詞、たとえば「夜中まで書く / 来月まで行く / 今月の13日まで出る / 月末まで帰る」のような語は「まで」の後に続けると、それぞれ「書きつづける / 通う / 出演する / 帰郷の状態」という継続性の意味を帯びる点に注意したい。また、

- つい最近まで…放置されていた。(III 56)
- 明け方まで電気がつけてあった。

と「ている、である」が現われる点も「から」と同様である。この場合は「つける」のような瞬間動作動詞も現われる。「まで」が継続動作の範囲を示すところから「10時まで書いてしまう」のような完了時点を表わす言い方は成り立たない。「まで」は動詞の他に名詞や形容詞等にも係る。

- 午後2時まで仕事。(II 17)
- 最後までそれだけが心残りだった。(II 29)
- 夜おそくまで電車や自動車の音がうるさくて (I 18)
- 来週のこの時間まで、さようなら (I 41)

また、先行語は名詞とは限らない。動詞を受ける例も多い。

- 慣れるまでかなりかかりました。(II 15)
- こうなるまでの苦労はたいへんだった (II 16)

かような、動詞に直接する方式は時間の「まで」に限られ、後で述べる場所の「まで」には現われない。また「までも、でさえ」の意味をもつ副助詞の「まで」にも現われない。したがって

- おとうさんがご飯を食べるまで…

は「食べ始メル(食べ終ワル)トキマデ」という時間の「まで」に決まっているが、

- おとうさんがご飯を食べるときまでぶつぶつ言う。
- 大みそかまで働く。

となると、名詞に接続しているため、時間の「まで」か強意の「まで」

か区別がつかない。時間「...ニナルマデ」とも、強意「...トキデスラ / ...トキマデモ」ともとれるわけである。時間の場合は「から」と対応する形式で格助詞ととり、強意の場合は「さえ、すら、も」と同様副助詞と考えるべきであろう。

3. 「～に」の用法

「に」は行為・作用の成立時点を表わす。「に」によって提起されたその時刻（または時間帯）に成立する瞬間動作で、継続行為の開始や終了にも、瞬間動作の瞬間的生起にも用いられる。その点「に」によって導かれる動詞はきわめて多彩で、他の助詞に比して制約が少ない*。

「に」には成立の瞬間時点を表わすものと、幅をもった時間帯を表わすものがある。

○ 6時32分に上野駅に着くと (II 17)

○ 何日の何時に来ると言われても (II 69)

瞬間時点とはいっても「ごろに」とかなりばくぜんとした言い方も可能である。

○ 8時ごろには帰ってきたし (II 58)

○ 何時ごろにどこそこの橋を渡ったというような事実が (III 42)

○ 1分おきぐらに電車が発着している (I 7)

幅のある時間帯とは

○ 月に5度も6度も足を運ぶ (I 26)

○ 眠っている間に取り替えがきかなくなる (III 2)

○ 心の柔らかな年代に読んでおきたい (III 14)

のように、その時間帯の中で成立する行為・作用・状態で、

* ただし「から、まで」と違って「に」には形容詞・形容動詞がふつう続かない。「富士山は4時に美しい。」などとは言わない。もっとも「は」を受けて「5時ごろにはもう暗い。」のような言い方はある。また、希望「ほしい、たい」表現は時間の「に」が可能で、「3時にほしい。/ 8時に来てほしい。/ 4時に帰りたい。」などと言える。

○ 中世代に爬虫類が住んでいた。(III 39)

○ 大学にいるときには講義も聞いていない。(II 61)

のように「ている」表現も可能である。また、特殊な言い方として

○ 複雑な現代に生きていくには (III 13)

のような「を*」と置きかえのきく継続行為に使われることがある。

「に」表現は体言にのみ後続し、「から」や「まで」と違って動詞に続く言い方を持たない。また、時として「に」を落とした言い方も成り立つことがある。

○ 学生時代(に)は...を楽しみにしていたものだった。(I 44)

○ 大正4年(に)この発明の特許をとった (I 54)

○ 上京したおり(に)印刷所をたずねてみた。(III 9)

「あした、明朝、午後、来年、昔、以前、最近、いま、現在」などは「から／まで」表現の場合は助詞を落とすことはできないが、「に」表現のときはそれ自体独立して用いられ、「あしたに終わる」などとは言わない。ただし「にする／になる／にかけて／にわたって／において」など固定した言いまわしの場合はこの限りではない。

○ 今になっても父をうらやましく思うのは (II 59)

○ 8時半ごろにかけて戦争のような忙しさが続く。(II 17)

○ 今日においてさえ...貧弱さは驚きである。(III 56)

4. 「～までに」の用法

「までに」は行為・作用の成立時点の範囲の限界を表わす。

○ 10時までに来られる? (I 16)

○ 1月17日までにご一報くださるよう (II 16)

ある行為・動作・作用の成立がどんなに遅くともその時点を限界として

* 時間の「を」は特に本論ではとり上げなかったが、行為の目標を表わす「12月1日を目安に完成を急ぐ。」「2月11日を建国の日とする。」などもある。

それ以前のある瞬間に成立することを示す。瞬間動作にも継続動作の開始や終了にも用いられるが、状態動詞「10時までにいる。」とか「ている / である」の状態表現や継続行為「10時までに書いている。」「10時までに書きつづける」などとは言えない。もちろん「15歳までにずばぬけていた」のような状態の意を帯びる動詞にも使えない。

「までに」形式が瞬間動作成立の限界点を示すところから、先行語は瞬間点を示す語に限られ、「5分間までに」のような幅をもった時間帯の語には続かない。それゆえ「5分までに」と言った場合、「5分」とは「8時5分」のような瞬間点であって「5分間」の意味ではない。ただし瞬間点といっても「5分ごろまでに」と、ばくぜん化した言い方は可能である。「までに」が瞬間成立の限界点を示すところから、継続性も表わす動詞をこの形式に続けると、それは瞬間動作の意味として働く。「15日まで書く」のときは「書きつづける」という継続の意であったが、「15日までに書く」となると「書き上げる / 書き始める」という成立時点の意と変わる。同様「10時までに行く」は「出掛ける / 到着する」,「10日までに出る」は「引越す」,「10日までに帰る」は「帰宅する」という瞬間動作となる。

なお、この形式は「3時までに書いておく。 / あしたまでに聞いておきましょう。 / 7時までに始めよう。」のように、多くは有意志性の人間行為に用いられ、他力本願の人間行為や自然現象・作用などを表わす動詞が来る場合も、それに対する話し手の判断や推定が付加されていると考えるべきである。

- 2時までに売り切れてしまう(ニチガイナイ)。
- あすまでに死ぬ(ト私ハ思ウ)。
- 夕方までに雨が降り出す(デショウ)。

「までに」は成立点の限界の他に、時間帯の限界を示すこともある。

- 午前10時から午後4時までに授業のある日が (I 5)

5. 「～で」の用法

「で」は終了時点を表わす。終了時点ゆえ、その行為・作用は継続する行為・作用であることを言外に認めての表現である。

○ 余震は3時10分でやんだ。

継続してきた(と判断した)行為・作用の完了終止する時点を示すという点では「に」の用法と一部重なるが、表現意識が異なる。

「で」は今まで継続してきた(と認定した)行為・作用の終了点であるから、「5時～地震があった」「日曜日～行く」のような瞬間成立の用例や「5時～始まる」のような開始点の用例には「で」は不可能である。(この場合は「に」を用いる。)したがって「5時で死んだ」は可能でも「5時で生まれた」とはまず言わない。しかも「5時で死んだ。」と「で」を用いた場合は「に」と違って、とにかく何とか続いた生命活動も5時でついに止まってしまったという、継続動作や状態(生きている)が終了して他の動作や状態(死)に切りかわったという意識が働く。「5時に閉店です。/ 5時で閉店です。」の差も同様である。「に」は単にシャッターを降ろす時刻を問題とし(それゆえ「閉店」は瞬間動作)、「で」は今まで続いた営業を閉店状態に切りかえる刻限を考慮する(それゆえ「閉店」は継続動作)。「で」が「で」以前の継続行為・作用を問題とするとところから、たとい「で」以後に行なう行為を表わす動詞が後続した場合、たとえば「10時で寝る。/ 10時で帰る。」でも、決して寝る時刻や帰る時間を述べることに話し手の意図があるのではない。それまで続けていた何か(それはことばの上には表わしていないが、仕事・勉強など)を10時という刻限で打ち切り、他の行為(「寝る・帰る」など)へ切りかえるという転換意識なのである。言ってみれば「10時で寝る」は10時以降の寝る行為が問題なのではない。それまで続けた10時以前の行為の終了転換に表現の重心が置かれているのである。それは「仕事を10時でやめて寝る」と等価であることを意味するのである。その点、同じ文脈でも「で」と「まで」とは逆の意味をもつ。「10時まで

寝る。/ 10時で寝る。」寝ている時間は「まで」が10時以前、「で」が10時以降である。

「で」は継続行為・作用の転換時点のみを問題とし、特に終了転換に先だつ継続の幅を問題としないところから、「から」を受けた言い方「5時から8時で終わる。」などとは言えない。この場合は次の「までで」が使用される。ただし、転換刻限・期限を示す時間帯、転換に要する時間・期間の語には用いることができる。

○ 5分ほどで済むと (II 81)

「赤ん坊は5分で眠った。/ 仕事は3時間で終わる。/ 1週間で帰る。」など。これは時間以外の「100円で買う」などにも用いられる。「で」にかような用法もあるところから、「5分で終わる」には「何時5分で」という時点を示す終了時刻と、「5分間で」という所要時間との2様の意味がある点に注意したい。最後に、「で」は「に」と同様、動詞に続く言い方を持たないこと、また、「で」のあとに形容詞・形容動詞が来ないことも付け加えておこう。

6. 「～までで」の用法

「～までで」は、継続する行為・作用が継続可能の限界に達し、それ以降まで続けない(または続かない)で終止することを示す。この形式は「～から～までで」と対応する形式で、継続行為・作用の起点を前提とし、その起点からずっと続いた行為・作用を打ち切る意識をもつ。したがって、終了点のみを問題とし起点をもたぬ

○ とけいは8時で止まっている。

などは「8時までで」とは言わないが、

○ このとけいは8時までで止まるだろう。

のように「今から8時まで」と起点を意識し継続の範囲を考えている場合には言えるわけである。同じ終了点を意識した言い方

○ 受け付けは8時～締め切りました。

も、「で」を用いれば終了点を問題とし「までで」を用いれば継続範囲を問題とする意識である。「までで」は継続行為・作用の幅を区切る作用があり、その点「で」と違って継続性をはっきり言表した言い方であり、継続動作・作用の転換意識はない。打ち切り意識である。用いられる動詞は、動作の終止を意味する「やめる、止まる、終わる、締め切る、打ち切る」などである。過去のことにも未来のことにも用いる。

○ 受け付けは9時から4時までで終わります。

「までで」は時間の幅を区切る作用ゆえ、先行語は1時点を表わす語のみで、時間帯を表わす「3時間までで終わる」などとは言えない。また、「までで」は可能な限界に達して打ち切るという話し手の判断ゆえ、

○ 仕事は8時まででやめよう。/ 終わりだ。

のように、話し手の意志・推定・判断等の気持ちが文意に添っている。「までで」は「まで」に断定の助動詞「で」が付いたもので、中止法を持つ。

III 動詞表現における場所の言い方

動作・作用・存在表現における場所の言い方は次の6種である。

- | | |
|----------------------|---------------------|
| ① 東京 <u>から</u> 出発する。 | ② 東京 <u>まで</u> 行く。 |
| ③ 東京 <u>へ</u> 行く。 | ④ 東京 <u>に</u> 行く。 |
| ⑤ 東京 <u>で</u> 行なう。 | ⑥ 東京 <u>を</u> 出発する。 |

1. 「～から」の用法

場所表現としての「から」は、動作の起点

- 渋谷から出る東横線 (I 8)
- ベルが壁から響く (II 78)

と、経由点

- 列車の窓から手が差し出される (II 15)
- 向こうの入口から回る (III 47)
- 10円玉を穴から入れる。

とがその主な用法である。なお、起点とはいっても移動の出発場所ではなく

○ 妙義山を裏から見る (II 36)

のような「裏、反対側、向こう、上」といった方向性のみの場合もある。

「から」は体言に後接し、「から」によって導かれる動詞は「流れる、歩く、通う」のような移動性の継続動詞や、「出る、出発する」のような指向性の瞬間動詞が多い。本来、相離れた2点間の関係を前提とし、距離をもつ行為・状態で、しかもその起点の側に立った表現である。したがって、

○ ベッドからからだを起こす (II 71)

○ 四方から監視されている (III 42)

などは可能であるが、「寝る、待つ、遊ぶ、いる、ある」などの動詞は「から」といっしょに使えない。距離の上に立つ動詞なら、「ている」の付いた状態表現も「見える」のような状態動詞も可能である。

○ 四方から通じている (II 32)

○ 物見岩から大絶壁が見える (II 34)

また、ある地点を境として以後変化が生ずる場合、起点の一変形として「から」が用いられる。瞬間動詞の場合と継続動詞・状態動詞の場合とがある。かような「から」は「で」と置きかえられる場合が多いが、「で」は単にその場所で行動や変化を起こすという気持ちを、「から」はその地点を境にして以後の行動や状態に変化が生ずるという意識を表わす。

○ ガーデンハウスから下仁田寄りを左折して (II 34)

○ 2丁目から道は下り坂になる。

○ 軽井沢から一路南下 (II 31)

○ 峠へさしかかるところから左へ (II 34)

「から」を受ける語が移動性をもたぬ名詞の場合は境界の意味になる。

○ 多摩川から南が川崎市だ。

かような「から」は「の」と置きかえが可能であるが、「の」は単に「南のほうの地域」という地点や方向を指示する意識しかなく、「から」のよ

うな連続し広がる範囲を区切るという気持ちをもたない。それゆえ、多摩川から離れた1地点の指示

○ 多摩川の南に田中君の家がある。

には「から」は使えない。「から」は範囲の起点を示す語であるから、「多摩川から南」は多摩川を含めた領域全体であり、「多摩川の南」は川を含まず、ある範囲とも1地点ともとれるのである。このことから「道から南側 / 道の南側」も、「から」は道を含めた南の領域をさし、「の」は道を距てた南の部分または南の1地点を、あるいは道路面の南の側を意味するのである。「1丁目～先」「三鷹駅～先」等、例は多い。

「から」には起点、経由点以外の意味が文脈によって生ずることがあるので注意したい。

○ 日本から来ました。

のような場合、「日本」を場所ととらず国家機構ととれば「日本ヲ代表シテ」の意味となる。「××会社から来ただけそれです。」などと同じである。「私から申し上げます。」なども起点・順番の他に「私が全体ヲ代表シテ」の意にもとれる点に注意したい。

「から」と呼応する形式としては次のようなものがある。

- 東京から立川を通して高尾まで延びています (I 7)
- 中野から石神井のほうに転居いたしました (II 48)
- 瀬戸から美濃にかけては...陶土地帯 (III 29)
- ホームからホームへ、販売車のまわりに集まり (II 15)
- 中込から神津牧場への道 (II 32)
- 上から下への力が強い (II 20)

2. 「～まで」の用法

「まで」は移動動作・作用の至り及ぶ範囲の終点を示し、「から～まで」と対応する。「歩く、泳ぐ、登る、屈ける」等の移動性の継続動詞と「行く、帰る、出掛ける、投げる」等の指向性の瞬間動詞とが用いられる。「ま

で」は「へ」と違って継続する移動行為を表わし、瞬間動詞を用いても移動の射程や幅を問題とする継続意識が強い。移動性動詞の例、

- 6階まで運ぶのはたいへんでしょう。(I 27)
- エネルギーが表面まで伝わって (III 23)
- 文化は...太平洋岸は房州まで及んだが (III 57)

指向性動詞の例、

- いかに上まで上がっていただくかです (I 26)

移動性・指向性を持たぬ動詞でも「ていく、てくる」が付けば「まで」と共存できる。

- ここまではいてきたたびを (III 46)

ただし、動いている列車内で「東京まで寝ます」などと言うことがあるが、これは「東京へ着くまで」の意で、時間の「まで」ととるべきだろう。

移動動作の「まで」は、移動行為の主体を「何が」「何ヲ」と設定できる場合に限られ、「何が(ヲ)ドコマデ...スル」のように動作主「何が/何ヲ」を持つ文型のとき現われる。

- シャボン玉飛んだ。屋根まで飛んだ。

は「(シャボン玉が) 屋根まで飛んだ。」であり、動作主「シャボン玉」が主語に立つ文型だから場所の「まで」となるのである。これがただ「屋根まで飛んだ。」なら、「台風で屋根まで飛んだ。」のように動作主は「屋根」となり、「まで」は「までも、さえ」という添加の副助詞となってしまう。(移動の「まで」は「から」と対応する格助詞と考えるべきであろう。)他の格助詞に承接する場合、「～からまで、～へまで、～にまで、～(を)まで、～でまで」等はすべて添加・強意の副助詞で、格助詞に立つ「まで」は体言に直接する場合に限られる。

3. 「～へ」の用法

「へ」は、離れた場所から目的地点に向かう動作の目標や指向場所を表わし、後に来る動詞によって、移動行為の開始(出発)

- 飲み屋へ向かったりする (II 83)
- ネクタイを忘れて外へとび出す (II 2)

移動行為の方向(進行方向)

- 交換経済を東へ伸ばそうとして (III 62)

動作の方向(指向)

- 向こうの目標の方へ平行的に向けられていて (II 76)
- 班長の机へ向かって (II 77)

移動行為の終了点(帰着の場所)

- 菊治の前へひざを落とすようにすわって (III 47)
- 峠へさしかかるところから左へ (II 34)

などを表わす。用いられる動詞は「歩く、泳ぐ、登る」のような移動性の継続動詞、および「向ける、出発する、投げる」のような指向性の瞬間動詞や「来る、着く」のような帰着性の瞬間動詞である。ただし、「前の方へ坐る」「夜はうちへ手紙を書く」(I 19)のような移動を前提とした動詞も用いられ、また「聞こえる、知れる」のような進展性をもつ状態動詞も用いられる。

- ふすま一重の茶室へ聞こえはしないかと (II 48)

「へ」は常に体言に後接し、連用修飾語として動詞へかかる。が、「の」を伴って連体修飾をなす場合や、「は、も」を伴う形式も見られる。

- 神津牧場への道 (II 31)
- 宿へはバス停留所から 15 分の歩き (II 33)

「へ」は「まで」と違って「歩く、登る」等の継続動詞でも「へ」と組み合わせると「歩き始める、登山する」という瞬間動詞の意味あいを帯びる点に注意したい。これは「まで」がその先へも進む可能性を秘めた移動行為の断止点、動作・事情の至り及ぶコースや範囲を問題としているのに対し、「へ」は移動行為の指向場所や方向のみを問題としているためである。それゆえ、方向や目的意識のみでコースの意味をもたない「東へ行く。/ 富士山へ登る。」などは「まで」への置きかえがきかないし、逆に、

コースの長さを問題とする「駅まで何分かかかる?」などは「へ」への置きかえができない。また、置きかえのできる場合「塀～投げる。/ この電車は三鷹～行きます。」なども表現意識に違いがあるのである。

4. 「～に」の用法

「に」は、(1) 主題たる事物や行為の対象が「に」によって示される場所に存在したり、また存在することによって起こる結果・状態を表わす。また、(2) 動作・作用が成り立つようその場所に位置を移動させる場合にも用いられる。移動の方向や帰着点である。

(1) の存在・定位形式には「ある、いる、続く」などの状態動詞が用いられる。この形式は「へ」と置きかえることができない。

- 悲しい時代が日本に続いた (II 10)
- この先に銅像が見えるでしょう (I 1)
- 道路に沿って走っている (III 36)
- 風景は南に海をもつ (III 55)

継続や状態の「ている、である」形式も多い。

- ある森に住んでいました (I 57)
- その中に盛られている複雑な意味 (III 12)
- 正面の白くすりのところにさわらびがかいてあった (III 52)

これらの動詞も「ている、である」が付いたため「へ」への置きかえはできない。

(2) の移動目標には「行く、着く、置く」などの瞬間動詞が用いられる。この形式は「へ」に置きかえることが可能である。

- 社長室に行って (II 72)
- 東京駅に集まる (I 13)
- 西武線に乗る (I 18)
- 東京に近づくにつれて (III 55)

これらの動詞は「へ」をとると移動の方向性の意識が、「に」をとると

帰着場所の意識が強まる。

- 水の中へはいって目方を殺すことを発明して、…水にはいれば目方が殺されるから… (III 39)

「に」には特殊な言い回しとして「において / における / にあたる」などがある。

- 先生の場所に当たる班長の机 (II 99)

また、形容詞が「に」を受けることもある。この場合は程度の基準を表わす。

- いまいところは学校にこそ近いが (I 18)
- 政治家の家庭に多い (II 58)
- 床に近いほうの障子 (III 47)

5. 「～で」の用法

「で」は名詞に付いて動作の行なわれる場所を示す。「で」によって示された場面内での瞬間行為であり、「に」のように他の場所からの移動や、存在には使えない。「で」によって生ずる行為は

- 二つの風が南方海上でぶつかりあって (I 38)
- 日本では、毎年1回大きな台風がやってきて痛めつけられる (II 63)
- 川幅の広いところではのんびり流れている (III 31)

のような自然現象もあるが、例は少なく、多くは

- プラットホームでかきこむそばの味 (I 44)

のように、有意志性の人間行為である。しかも動作主は(意識として)「で」の場面内におり、「車の中～落とす。」も「で」を使えば(現実には、または意識として)車中での行為となり、「に」を使えば車外からの行為となる。それゆえ「タクシーの中～忘れたらしい。」も、「で」を使うとタクシーの中にいる意識ゆえ忘れた行為のなされた場所を、「に」を使うと外にいる意識ゆえ忘れ物のあり場所を問題とする意識が生ずる。これは他動詞のとき生ずる相違点である。

○ 舞台の上(で / に)並べている。

○ 車の中(で / に)立てている。

等「に、で」の使い分けが行為者の位置を決定する。

○ この二つで身を立てていきたいと心に(で)決めています (II 30)

などもかような表現意識の差があるのかもしれない。なお、次のような場合には「に」のとき目的語が立たない。

○ 廊下で(あなたを)待っています。

○ 廊下に(――)待っています。

自動詞の場合も、

○ 室内(で / に)じっとしている。

○ 運動場(で / に)並ばされた。

と「で、に」の意味するところは同じであるが、やはり「で」を使えば行為に、「に」を使えば場所に表現の重点が置かれる。

○ 災害の中で生活しているようなものです (II 64)

○ いなかよりも都会に生活することを希望し (III 41)

○ あなた、しいの木の下にしゃがんでいらったじゃありませんか
(II 92)

しかも「で」は多く有意志性動詞が立つから、「並ぶ」のような無意志有意志どちらも表わす動詞の場合は「で / に」が動作主を決める大きな手がかりとなる。「～で並んでいる」は人間で、並ぶ行為を表わし、「～に並んでいる」は並んだ状態で場所に主眼があり、物品の場合が多い。「で」が行為・作用の描写、「に」が状態描写であるところから、「できる、ある」のような、作用も状態も表わし得る動詞は

○ パナナは日本(で / に)はできない。

○ 南の方(で / に)火事があった。

○ 教室(で / に)ある。

のように両表現が可能なのである。日本語に不慣れな外国人はこれにだまされて、「で」を使うべきところを

- 学校に試験がある。
- 横丁にけんかがあった。

などと言ってしまうのである。ただし、「において/にて」を使えば「で」と同じ意味となるからさしつかえない。

- 現代の日本においては、知的なものが尊重されている (II 39)

「で」に導かれる動詞はふつう動作動詞であり、「ある」のような状態動詞が来るときも、存在ではなく動作として用いられている。

- 外で宴会があつても (II 58)

○ 土地への異常な執着が生まれるのだ。ヨーロッパでそれがめだつて存在するのは土地生産性が高い国だけである (III 57)

場所の「で」は、時間の「で」と同じく、ある継続した状態の終了地点を表わすことがある。

- 富士山は新宿で見える。(そこ以遠からは見えないが)

- もうトンネルはないから次の駅で窓をあけてもいい。

これらはいずれも移動していることを前提とした言表で、「マデデ/マデクレバ/カラハ」等の意味に近い。ただし、「で」を用いると。

- この電車は三鷹駅で運転を打ち切ります。

のように、それまでの継続行為や状態を打ち切る行為をある地点で起こす、またはそれまで継続してきた状態に変化を来たすという意識を表わす。三鷹駅で運転を打ち切るという行為や変化を問題としているのであって、東京・三鷹間という継続行動の幅を問題としているのではない。その場合は「三鷹までで」と言わねばならない。

ところで場所の「で」は、先行語によっては他の意味を持つことがあるので注意せねばならぬ。まず、

- 試験は大学で行なう。

のような場合、「大学」は試験会場とも主催者ともとれる。動作や行事を主催する組織や団体が同時に場所を示す語でもある場合は注意したい。また、

○ 砂場で遊ぶ。

の「砂場」は遊ぶ場所とも手段ともとれる。「エレベーターで死んだ。/ ミキサー車で作る。/ 机で作る。」等。最後の例は材料ともとれる。

「で」は名詞や形容動詞なども導くことがあるので例を出しておく。

○ 外では政治家である父だった (II 59)

○ 家庭での読書 (III 14)

○ 現場でオートバイの検査に夢中なのだから (II 73)

6. 「～を」の用法

「を」は自動詞が続く場合、(1) 出発または離れ去る動作の開始地点を表わす。「を」によって導かれる行為は有意志性の行為である。

○ 汽車で上野駅をたち (II 17)

○ 玄関をはいてすぐ右側です (I 1)

「を」はまた、(2) 移動動作の経過する場所を表わす。

○ 銀座通りを歩いていても (III 43)

○ 気ぜわしくホームを行き来する駅弁売り (II 14)

○ やや下仁田寄りを左折して (II 34)

この用法は「パリの町を流れるセーヌ川」のように無意志性の運動も現われる。(1) (2) とも「出る、離れる、歩く、通る、散歩する、渡る、飛ぶ、泳ぐ」など移動行為を表わす動詞に限られ、瞬間動詞が来れば (1) の、継続動詞が来れば (2) の意味を表わす。したがって同じ動詞でも、(1) 「立川を通って高尾まで」(I 7), (2) 「道を通る人」のように、「を」の先行語が地点を表わす (1) の場合には「経て」という瞬間動詞の意味に、距離をもつ経過場所の (2) の場合には「歩く」という継続動詞の意味に用いられている。

をとから

「を」が出発点・経過場所を表わすところから、しばしば「から」の用

法と重なりあう。

○ 外とうを着て、それでうちを(から)出てしまった (II 2)

(1) の出発点としては「車～降りる。/ へや～飛び出す。/ 門～出る。」

(2) の経過場所としては「階段～ころげ落ちる。/ はしご～降りる。/ 山～

降りる。」などが「を、から」どちらも可能な文脈であるが、「から」を用

いると、その地点・場所とそこ以外の場面との間に範囲の境界線を引き、

ある地点を経てその境界線を越える意識(経由点)、またはその範囲から別

の場面へと移行する意識(起点)が働く。この意識が文脈によっては「門か

ら出る。」のような経由点を表わしたり「へやから飛び出す。」のような起

点を表わしたりするのである。いっぽう「を」は移動する場面や離れ去る

地点を表現の対象としてとり上げる目的意識があり、それゆえ「を」に先

行する体言はその移動行為のなされる場面(経過場所)か移動を開始する地

点(起点)でなければならない。このことから同じ場面内を移動する「坂を

下る。」は「から」が使えず、別場面への移行を前提とした行為「階段を

降りる。」のような場合にのみ「から」も使えるのである。いっぽう、よ

そから他の場面へと移行する経由点「窓～降りる。/ 窓～逃げる。」など

には「を」が使えない。また、どちらも可能な文脈「階段～降りる。」など

は「を」を用いれば降りる継続行為のなされる一定場面(経過場所)を、「か

ら」を用いれば「どこから降りようか? あの階段から降りようよ。」とい

う別場面へ移行するための経由点を表わす。階段のような行為の経過場所

でなく、行為の目標場所を表わす「玄関をはいる。/ 非常口を出る。」も、

別場面への移行を意味する「どろぼうが玄関～はいった。/ 火事のときは

非常口～出てください。」などには「を」が使えない。「から」を用いる。

また、「途中から引返す。/ 上空から降りる。/ 南から戻る。/ 沖から帰

る。/ 外国から来た。」のように、そこと対立する他の場面(家、地上、北、

岸、日本)を念頭に置き、その対立する場面へと移行する(または戻る)運

動にも「から」が用いられ、「を」は使えない。かような「から」の用法

は逆方向の行為も可能で「へ」によって表わされる。

「から」の以上のような性質から「大学～出る。」も「から」を用いると、連続する範囲の境界線を越えるという意識から‘大学構内より外へ出る’という意味が生まれる。「大学を出る。」にも同様の意味があるが、むしろ「出る」行為の対象が「大学」で、‘大学を離れる。大学教育を終える、卒業する’意味となる。「大学から卒業する。」とは言えない。「大学から社会へと飛び出す。」のように別場面へ移行する意の文脈にのみ「から」は使えるのである。

最後に「を」は目的意識を持ち、起点の場合は有意志性動詞に限られるところから、「はしごから落ちた。」を「を」にかえることのできない点も付け加えておこう。

をとに

「を」が移動行為を表わすところから「に」の用法とも一部重なる。

○ 玄関を(に)はいつてすぐ右側です (I 1)

「外国～旅行する。/ 門～はいる。/ 横丁～曲がる。」など移動性の自動詞の場合である。「に」は移動する目的の場所つまり指向性を表わし、「富士山に登る。/ 西に沈む。」のようにそこ以外の場面に立って目的の場所や方向を指向する意識をもつ。「を」は現にその移動行為の経過する場面自体を問題とする意識で、「坂に登る。/ 川を泳ぐ。/ 道を行く。」のように「に」への置きかえを許さぬ場合も多い。「岩山～登る。」も、「に」と「を」で発想に違いがあるわけである。教育の現場で「木～登る。」は「木に登る。」だと頭から教えこむ向きが見られるが、木全体を登る目的対象として同時に意識する場合はいいとして、木を、登る行為の行なわれる場面として意識する場合、したがって木の幹を、登るコースとして下から上へと順次継続的にとらえていく部分的判断のとき、たとえば

○ この木をどんどん登っていくと、こずえに鳥の巣があるよ。

という場合には「に」が使えない。「に、を」の選択は前後の語によって決定するのではなく、発想に由来する文脈が左右するのである。

なお、移動動作以外の行為、たとえば「とる」のような他動詞も「カードを(に)とる。」と「を、に」の併用が見られる。この場合は「何」をとるのか? カードをとる。」「どこにとるのか? カードにとる。」のように「を」は行為の対象を、「に」は行為の向けられる場所というはっきりした違いが認められる。

をとで

「で」が動作の行なわれる場所を示すところから、その動作が移動動作である場合には「を」と用法上重なる。「川～泳ぐ。/ 氷の上～滑る。/ 公園～散歩する。/ 運動場～マラソンする。/ 海底～捜す。」

ただし、「を」によって示される場面はその移動動作・行為の対象となる場面であり、その移動は目的意識をもつ。「で」は「にて」で、単にその行為の行なわれる場所ではない。それゆえ「川を泳ぐ。」は泳いで向こう岸へ行く(または上る, 下る)こと自体に目的があり直線的行為である。「川で泳ぐ。」は移動行為自体に目的はなく、泳ぎ回る行為実現のために「川」という場面を選んだにすぎない。このことから「を」とすると「ドコソコヲ」という場所に重点が置かれ、「で」とすると「...デ何々ヲスル」という行為に重点が置かれる。「あの角～曲がる。/ 3 番目の橋～渡る。」なども「を」を使うと目的地点到達のためにはどの角を曲がらなければならないか? あの角を曲がればよい、という地点の指示に重点が置かれる。いっぽう「で」を使うと「あの角でどうしますか? 曲がるか曲がらないか? あの角で曲がりなさい。」という行為に重点が置かれる。「で」が移動行為以外にも「角で遊ぶ。/ ～立ち話する。/ ～待ってなさい。」と言えるのはかかる理由による。しかも、「を」が行為の目標場面を、「で」が示された場面での行為自体を問題とするところから、「を」の場合はその場面以外にあって「ドコソコヲ」と考慮する意識が、「で」の場合はその場面内にあって何かを行為するという意識が生まれる。「外国～旅行する。」も「を」の場合は話し手は日本にあって海外旅行を考えており、「で」

の場合はその外国内でほうほう旅行することを脳裏に描いている。「を」と「で」は行為する人の（けっきょくは話し手自身の）観念的位置に違いがあるわけである。「海底～捜す。/ 雪山～滑る。」など、「を」は「ドコヲ? 海底ヲ」と海底を全体的なものとして距離をおいてとらえ、かなり観念的な表現であるが、「で」は話し手自身海底にある意識から「海底ノ中ノトアル特定ノ場面内デ何ヲスル?」という行為の行なわれる個所を意識したきわめて具体的な表現と言えるであろう。

「捜す」のように他動詞をとる場合は、特に移動行為とはかぎらない。「ドコソコヲ××スル」と、動作の対象を提示する。「教室～掃除する。/ 庭～掃く。/ 廊下～ぞうきんがけする。/ 日本～研究する。」など、「で」を用いればその場面内での行為、「を」を用いれば客観的にその場面を行為・動作の対象としてとり上げ考えている表現である。それゆえ最後の例のように「で」を用いれば、単に研究する場面として「日本ノ国内デ」, 「を」を用いれば「日本トイウ国家ヤ文化ナドヲ」という差が出てくるのである。

「を」は本来客観的にある場面・地点を行動対象としてとりあげる気持ちがある。話し手は現実の場からその場所を行動対象として観念的に指向する気持ちである。たとい場所を示す語が用いられていても、その場所を行動する場面としてとらえているのではない。行為の目標・対象としてとらえるのである。「頂上をめざして登る。」のように離れた地点からの指向ができるのも「を」のかかる性質による。「教室を掃除しろ。/ 廊下をぞうきんがけしろ。」など「を」による表現は教室や廊下を行為者の身を置く場所としてとらえているのではなく、掃除しぞうきんがけをする個所としてはあくしているにすぎない。「壁をふけ。/ 窓ガラスをみがけ。」のような人間の位置できぬ場所でも「を」で指示できるのは、「を」が他動詞による行為の対象物を示す働きを持つからであり、けっして行為をなす場面として提示されているのではない。かような「を」はもちろん「で」に置きかえることはできない。「で」は、「で」によって示される場面内に観念的に位置して、そこで何かを行動するという意識なのである。